Japanese Association for Religious Studies

感やむなしさといった感覚から入信した若者が、仏教を宗教的源泉の一つとするオウム真理教において、自分たちの苦しみを「無常」によって捉えようとするのは自然なことだろうが、そこでは「無常」は法則性という意味での真理の把握によって克服可能なものと理解されていた。それは「ブラックボックス」、「データ」、「情報」、「エネルギー」、「レーザー・ホログラフィ」、「ロボット」、「光通信」、「コンピュータ」、「プログラム」、「クローン」といった彼らを取り巻く近代社会や情報社会の事物をシンボルとして「無常」が理解されたからだと思われる。無常を理解するのに自分たちを取り巻く事物によっているという点においては伝統的無常観と変わる点はない。ただ取り巻く事物が変わったというだけである。しかし、シンボリズムの変化にともなう無常観の意味変化とその帰結は非常に重大なものであった。

わたしたちは伝統的な無常観を取り戻すことができるのだろうか。オウム真理教の事例を見てみると楽観はできないように思われる。もちろん現代の無常観には自然のシンボリズムが失われている、ただそれだけのことで、伝統的な無常観とオウム真理教に見られるような無常観とは無関係であり、伝統的な無常観を取り戻すことが重要なのだと考えることもできるかもしれない。しかし、われわれは自分たちを取り巻く事物をシンボルとして無常を理解してきたということが正しいとすれば、オウム真理教の事例はわれわれと無関係とは言えないであろう。というのも、それは「無常」が近代社会や情報社会のシンボリズムによって理解されると、それを予測可能性や操作可能性によって乗り越えようとしてしまい、自然や動物はいうまでもなく人間という他者までをも操作対象とし、絆や連帯、共同性を大きく損ねてしまうということを示しており、しかも私たちを取り巻いているのはオウム真理教を取り巻いていたのとほとんど変わりのない環境であり事物だからである。

しかしそれでも今回の地震と津波によって、現代人の無常観がふたたび自然のシンボリズムと結びつく可能性はあるだろう。それは、わたしたちは近代的都市的環境ばかりではなく自然によっても取り巻かれているということを今回の事態によってあらためて強く印象付けられたからである。わたしたちは自然のシンボリズムを取り戻すことができるのだろうか、それとも何か操作可能なものによる無常の克服へと向かってゆくのだろうか。

震災死と宗教の役割――四川・東日本の大地震を事例に――

何　燕生

二〇〇八年五月一二日に発生した中国の四大地震では約八万人の死者を出した。一方、二〇一一年三月一一日に発生した東日本大地震では約二万人の死者を出した。震災死は近年来、我々にとって最も身近な出来事の一つとなっているのだ。

本研究の目的は、この二つの地震に際して、そもそも宗教(者)はそれぞれどのような対応をし、また、被災者は宗教(者)にいったい何を求め、さらに、宗教(者)による公益事業の可能性は果たしてどこにあるのかを考察する中から、震災における宗教の役割を探ってみることにある。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

四川大地震に関しては、什邡市羅漢寺を事例に取り上げてみた。唐代に創建され、馬祖道一などの著名な禅僧を輩出したこの禅寺では地震が発生した日から、延べ三〇〇〇人の避難者が生活するようになり、炊き出しを中心とした救援活動が展開される一方、仮設の産婦人科病院の設立にも協力した。出産用のベッドがないため、禅床、禅卓を使って代用し、寺の食堂を分娩室として使った。中国仏教の戒律観や宗教場所の神聖性の観点からのタブーが克服され、人の命を救うことを最優先課題として、一日約三〇〇〇人の飲食を用意した。また、一〇八人の赤ちゃんが相継いで仮設病院で誕生し、「羅漢ベビー」という愛称が送られ、寺との新しい絆が結ばれることになった。住職の素全氏は、「我々仏門では人の死を見て救わないことが最大のタブーだ」、「一人の命を救うのが七級の仏塔を作るより勝る」のだと語る。

一方、東日本大震災に関しては、宮城県石巻市の洞源院を事例に取り上げてみた。洞源院は曹洞宗の寺院で、海上安全祈願の寺として知られ、現住職は小野崎秀通氏である。地震が発生した日、洞源院での避難者数は約四〇〇名となり、身元不明者の遺体がたくさん運ばれ、寺は避難所と共に、直ちに遺体の仮安置所となった。避難所として使われていた半年間、避難者の約束事が設けられ、いわゆる「洞源院八カ条」で、これを守ることで互いに心を通わせ支え合う生活信条とした。また、朝の勤行、ラジオ体操、朝会等日々様々な活動を行う一方、震災から七日毎に追悼法要を行ってきたという。避難所は二〇一一年八月八日に解散したが、各方面から頂いた支援に報うために、また自分たちの自立のために、避難者一〇八人が会員となって、「洞源院叢林舎」を発足し、近くの仮設住宅などでお茶会や炊き出しなどを中心に活動を展開している。

そうした宗教者による献身的な支援活動が社会で広く評価されるようになり、震災を境に、宗教への期待は高まってきたようだ。例えば、中国学界が行った四川大地震に関するアンケート調査の結果によると、震災後は宗教への好感を持つ人が増え、被災者への心のケアについて、最も相応しい人として、医者よりも宗教者を挙げる人が多く、震災における宗教の役割について、宗教者による追悼法事の実施や避難所での祭壇の設置を挙げる人が最も多かったことがわかる。また、東日本大地震における宗教者の活躍が多くのマス・メディアによって報道されてきたことは周知の事実である。

したがって、結論として、次のようなことが言えるのであろう。(1)寺院は生死と向き合う場だが、震災の場合はとくにその役割を果たしていること。(2)社会にとって、寺院は社会システムの補完的な存在であり、社会システムが機能不能になった時その威力を発揮する場であること。(3)宗教自身にとって、自然災害は同時に新しい宗教システムへの再構築の契機にもなること。羅漢寺の一〇八人の「羅漢ベビー」という絆や洞源院の「叢林舎」という絆は、いずれも従来のシステムを超えた出来事なのである。

NII-Electronic Library Service